# 平成３１年度事業評価結果報告書

東京都写真美術館外部評価委員会

令和２年７月２１日

# 目　　次

１　座長あいさつ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１頁

２　総　評　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２頁

３　評点一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　４頁

４　評価結果一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５頁

座長あいさつ

このたび、東京都写真美術館外部評価委員会は、平成３１年度の東京都写真美術館の運営に対する評価結果を、伊東信一郎館長に提出しました。

東京都写真美術館は、「存在感のある美術館運営」をミッションとしており、そのミッションの具体的な事業運営項目に沿って、実績を 5 段階により評価しました。

評価にあたり、「作品収集、作品管理、調査研究」では、館の作品収集の基本方針に基づき、収集が適切、的確に行われていること、「教育普及」では、多様な層に様々なプログラムを提供しており、手話対応など障害者への配慮もなされていること、「広報・宣伝」では、報道機関との地道な連携や SNS の活用などに着目しました。美術館の活動を財政面から支える観点からは、支援会費を自主財源として有効に活用し、展覧会予算を充実させている点を高く評価しました。

また、「展覧会」では、年間観覧者数が定量目標数 38 万人に対して、３６万人強と目標を達成できませんでしたが、これは新型コロナウイルスの影響により、休館していたことが原因であり、この問題がなければ十分に目標を達成したものと推察されます。このため、評価に際しては定量目標を達成していることを前提に評価を行いました。

一方、SNS を含めた広報のさらなる充実や、美術館周辺のインフラの整備など、取組を一層進めていただきたい課題もあります。

今後も東京都写真美術館が、世界に向けて優れた写真・映像文化を発信するとともに、地域の「顔」としての美術館となるよう大きな期待を寄せているところです。

当委員会では、今回の評価が東京都写真美術館の事業運営の改善、発展の一助となるよう各委員から寄せられた提言、課題等に着実、迅速に取り組まれるよう望むものです。

令和２年７月２１日

東京都写真美術館外部評価委員会

座長　　柏　木　　博

## 【総評】

平成３１年度の美術館運営について、「優れた写真・映像作品の計画的・効果的な収集」では、『収集の基本方針』と『写真作品収集の指針』に基づき、系統的かつ計画的に歴史的にも貴重な作品を含め、日本を代表し世界にも評価の高い作家のものを丁寧にセレクトして収集している。

「的確な作品管理」では、文化財保存修復学会での研究発表で新たな分野を開拓するとともに、文化財レスキューに携わるなど、写真保存についての日本におけるセンターとして意義のある役割を果たしている。

「調査・研究」では、収蔵展や一般書籍化された図録が、海外で影響力の大きい媒体や写真賞で高い評価を得るなど、魅力ある日本の写真が世界に向けて発信されていると評価できる。

「展覧会」では、豊富な収蔵作品の質と量が遺憾なく発揮され、親子連れや初心者にも見応えのある展示となった。また、出展作家や学芸員のギャラリートークや講演会など関連事業の積極的な展開によって、展示への理解が深められると同時に集客にも繋がった。

「恵比寿映像祭」では、第１２回を迎え恒例化の効果が高まっており、地域全体での連携が進められるなど、まさに地域の活性化となっている。展示では話題となった作品で幅広い層の来場者を獲得したほか、新進気鋭の作家や監督を紹介したプログラムなどで前年を大きく上回る観覧者を集め、映像祭の認知度を一段と上げることができた。

「普及教育活動」では、展示室で対話しながら自由に鑑賞するプログラムやフォトグラムの製作体験など様々なプログラムを展開している。また、子どもや障害者をはじめ、多様な方々に対応したプログラムが提供されている。

「図書室事業」では、蔵書数が約１１万冊と、写真を専門としたこれだけの資料を持つ施設は国内では他に類を見ない。研究者、学生、写真ファンの人々にとって重要な場所であり楽しみの場所でもある。

「広報・宣伝」では、プレスリリースをはじめ、記者へのブリーフィング、プレス内覧会などメディアとのネットワークを有効に活用した取組を進めており、新聞や雑誌などいろいろなメディアで “TOP”の記事を見ることも多く、今までの広報の努力が実を結んでいる。

「インターネット等を用いた情報発信」では、丁寧に制作された展覧会の解説動画が、コロナ禍の中、自宅で鑑賞できるオンライン展覧会としても素晴らしい試みであるため、今後も是非続けるべきである。

「来館者サービス」では、ミュージアムショップ、カフェの運営が、どちら

も魅力的な展開となっている。また、託児所サービスが試行され子育て世代の利便性向上への足掛かりを作ったほか、手話付きギャラリートークなどの意義ある実践が行われ、バリアフリーに向けての取組も増えており評価できる。

「企業・団体等の参加促進」では、２４４法人が参加する支援会員制度が定着しており、国内ではまれにみる数の多さである。会費収入は、前年を超える８，１７５万円と歴代２位を更新した。

「ボランティアの参画推進」では、教育普及部門の運営にはボランティアの存在が欠かせないため、良質のボランティア組織を持つことは重要であり、外部の有識者を招いた研修会や、連絡会を定期的に開催するなど、その運営努力は評価に値する。

「地域との連携強化」では、「あ・ら・かるちゃー文化施設連絡協議会」の活動が定着し、広く充実した形で面的に地域と連携を進めている。

「インフラの改善」では、館内や展覧会に係る多言語表記や人的対応など、多言語化やバリアフリー化が推進された。また、セキュリティ対策が強化されたことも評価できる。

なお、平成３１年度の年間観覧者数が定量目標の３８万人に対して、わずかに及ばない３６万人強であったが、原因は新型コロナウイルスの影響で２月２９日より休館していたことによるものと明白である。このことがなければ十分に目標は達成されていたと推測される。

このため、定量的な側面において目標を充足していると評価するとともに、質的側面においては、これまでに引き続き高い質を発揮していることから、評点を「５」としたことを付記する。

# 平成31年度事業　評点表

| 評　価　項　目 | | 評点 |
|---|---|---|
| **1 作品収集・保存事業の評価　＜過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館＞** | | **5** |
| (1) | 優れた写真・映像作品の計画的・効果的な収集 | 5 |
| (2) | 的確な作品管理 | 5 |
| (3) | 写真・映像に関する幅広い調査・研究 | 5 |
| **2 事業展開の評価　＜質の高い写真・映像文化と出会う美術館＞** | | **5** |
| (1) | 来館者数の目標達成と集客増 | 5 |
| (2) | 質的な満足を得られる展覧会の提供 | 5 |
| (3) | 恵比寿映像祭 | 5 |
| (4) | 良質な映画の誘致と上映 | 5 |
| **3 教育・普及事業の評価　＜写真・映像文化の普及と新たな創造を支援する美術館＞** | | **5** |
| (1) | 対象者に応じた多様なプログラムの提供 | 5 |
| (2) | 図書・情報の収集と公開の促進 | 4 |
| **4 広報事業・情報発信の評価　＜写真・映像文化の拠点として貢献する美術館＞** | | **4** |
| (1) | 効果的な広報・宣伝 | 4 |
| (2) | インターネット等を用いた情報発信の推進 | 4 |
| **5 来館者の視点、企業・団体の参加、ボランティア事業、地域連携の評価　＜開かれた美術館＞** | | **5** |
| (1) | 良質なサービスの企画、提供 | 5 |
| (2) | 企業・団体の参加促進 | 5 |
| (3) | ボランティアの参画推進 | 5 |
| (4) | 地域との連携強化 | 4 |
| **6 インフラの改善　＜ミッション達成のための必要な基盤の整備＞** | | **4** |

※評点区分：【高】5　【やや高】4　【中】3　【やや低】2　【低】1

# 平成３１年度事業評価結果一覧

## １　作品収集・保存事業の評価　【評点５】

＜過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館＞

### （１）優れた写真・映像作品の計画的・効果的な収集　【評点５】

≪評価の理由≫
●「収集の基本方針」と「写真作品収集の指針」に基づき、歴史的にも貴重な作品を含め、質の高い作品を厳選し、効果的に収集されている。
●作品を系統的、また計画的に収集しており、第一期から第三期にいたる写真（作品）は、日本を代表し世界的にも評価の高い作家によるものを丁寧にセレクトしている。歴史的な作品についても、調査を前提にして収集している。

≪指摘された課題・提言等≫
●「写真作品収集の指針」が策定されてから 14 年を経過しており、コレクションの全体像を再検討すべき段階にあるように思われる。
●「指針」では写真美術館の展覧会で扱った作家作品の収集が謳われており、多年にわたり展覧会のラインナップが多様化していくなかでコレクション自体も極めて多岐にわたる内容を包括するため、折に触れ全体像をチェックする必要がある。

### （２）的確な作品管理　【評点５】

≪評価の理由≫
●文化財保存修復学会で、これまで写真分野への使用事例がほとんど報告されてこなかったゲルによるクリーニングについての研究を発表し、新たな分野を開拓している。
●台風１９号で被災した川崎市市民ミュージアムの浸水被害に際しては、いわゆる文化財レスキューにも携わるなど、写真保存についての日本におけるセンターとしての意義ある役割を果たし、収蔵作品資料に対する救済支援、助言など、蓄積された技術や研究成果の社会還元を図った。

≪指摘された課題・提言等≫
●特になし。

（３）写真・映像に関する幅広い調査・研究　　【評点５】

≪評価の理由≫

●各学芸員が限られた時間の中で、展覧会事業に連動してそれぞれの研究成果を具現化していることは評価できる。

●収蔵展「山沢栄子～」は、英 British Journal of Photography などで紹介され、一般書籍化された図録は、米アパチャー財団が創設した「Paris Photo-Aperture Foundation PhotoBook Awards」展覧会図録部門のショートリストに選出されるなど、海外で影響力の大きい媒体や写真賞で高い評価を得た。魅力ある日本の写真が、世界に向けて発信されている。

≪指摘された課題・提言等≫

●調査・研究の発表の場は展覧会に限られるわけではない。研究紀要を初めとする他の媒体での成果発表が一層期待される。

●内外の研究機関との共同研究などに、より積極的に取り組む必要があり、これらの活動については、外部資金の獲得や、これまで以上の予算措置も積極的になされるべきである。

●学芸員に対し交替で研究に専念する期間を設けるなどして、館の活動の基礎を成す調査・研究の充実に努める必要がある。

## ２　事業展開の評価　　【評点５】

＜質の高い写真・映像文化と出会う美術館＞

### （１）来館者数の目標達成と集客増　　【評点５】

≪評価の理由≫

●年間観覧者の目標３８万人に対して、今年度は３６万人（９５％）とわずかに及ばなかったが、原因ははっきりしており、新型コロナウイルスの影響である。それを考慮すれば、この問題がなければ十分に目標を超えていたと思われる。

●担当学芸員によるギャラリートーク、アーティストによるトークなど関連事業も充実して増客に努めている。

●開催した自主企画展、収蔵展などは多くの場合目標を達成しており、展示内容が適切で魅力的であったことを示している。

≪指摘された課題・提言等≫

●誘致展の集客改善などの問題は依然としてあると思う。

（２）質的な満足を得られる展覧会の提供　　【評点５】

≪評価の理由≫

●年間２０本の展覧会を行っており、収蔵展８本、自主企画展６本、誘致展６本、いずれも魅力的な展覧会である。

●出展作家や学芸員のギャラリートークや講演会など関連事業の積極的な展開によって、展示への理解が深められると同時に、集客にも繋がった。

●「嶋田忠～」では、親子連れなど、来場者のうち初めての来館者が 61%を占めるなど、課題であった新規層獲得が進んでいる。

●「TOP」コレクション展は豊富な収蔵作品の質と量が遺憾なく発揮された展示で初心者から玄人筋まで見応えがある。

●年間を通じて、展示では多様な分野の写真展を企画している。また学術的に価値の高い展示も毎年欠かさず行っている。

≪指摘された課題・提言等≫

●スタッフへの人数を考慮すると年間の展覧会の本数が多すぎるように思える。１本の展覧会の会期を延長して、年間の本数を減らすことはできないか検討すべき。

●二つの「TOP コレクション」展の年間テーマ「イメージを読む」の性格づけがいまひとつ分かりにくかった。あえて異なる性格を与えたようだが、４作家に限った「場所をめぐる４つの物語」と、多くのコレクションを包含し史的概観に留意した「写真の時間」から、統一テーマを冠した合理的な意味を見出すことは難しい。他方、２つの展観がそれぞれ新規性をもった企画であることをさほど強く押し出しているわけでもない。前者は比較的近年の企画展で選択された作家(山崎博、内藤正敏)が含まれており、リピーターには既視感が感じられただろう。「コレクション」の名を冠した展観は文字通り美術館活動の基幹を表すものであることから、さらなる熟考を経た「TOP コレクション」展を期待している。

●独自のテーマを設定した企画として『イメージの洞窟』展があるが、事前の評判は高かったように記憶しているが、来館者からの反応に特別なものは見られない。問題点の分析を行い、今後に役立てて欲しい。

（３）恵比寿映像祭　　【評点５】

≪評価の理由≫
●恵比寿映像祭は、恒例化の効果が高まっており、地域全体での連携もあり、まさに地域の活性化にもなっている。
●野外ドーム型シアターでの教育映像作品「ハナビリウム」が話題となり、幅広い層の来場者を獲得したほか、新進気鋭の監督や作家を紹介した有料上映プログラムが連日満員になるなど、昨年を大きく上回る観覧者を集め、映像祭の認知度を上げた。
●初心者、美術愛好家、外国人など、多様な来場者に合わせたきめの細かいガイドツアーが実施された。
●周辺施設やギャラリーのほか、六本木、渋谷など近隣地域の映像祭との連携が進められた。
≪指摘された課題・提言等≫
●海外との連携を深化できると、より一層魅力を高められると思う。
●「映像」の意味が希釈された感じがし、世界に数多くある映像祭の枠組みからは外れかねないような印象を受けた。
●ライヴやトークなど、多彩な催しも、有意味なものになっているのか疑問である。

（４）良質な映画の誘致と上映　　【評点５】

≪評価の理由≫
●商業映画館などでは見ることがなかなかできない良質の映画を上映しており、写真美術館独自の役割を果たしている。
●商業的には上映が難しいが、芸術性が高い映像作品と出会うことができる貴重な場となっている。アンコール上映された「二宮金次郎」は集客にも成功した。
●「アート&ヒューマン」というテーマ通り、上質な作品を揃えている。人気や知名度ではなく作品の内容を重視して目の肥えた客やファンの期待に応えている。

≪指摘された課題・提言等≫
●定評のあるポーランド映画祭に加えて、スイス、ロシア、中国の映画祭が誘致され、希少な映像作品が上映された。結果を精査し、他国の映画祭の企画に活用されたい。
●「アート＆ヒューマン」というテーマは曖昧すぎる印象なので、年ごとのテーマを設けるなどして、これまで以上の強みにしていけるよう期待する。

## ３　教育・普及事業の評価　　【評点５】

### ＜写真・映像文化の普及と新たな創造を支援する美術館＞

### （１）対象者に応じて多様なプログラムの提供　　【評点５】

≪評価の理由≫
●展示室で対話しながら自由に鑑賞するプログラムやフォトグラムの製作体験、デジカメから白黒プリントを製作する体験など暗室を使ったプログラム、「驚き盤」や「コマ撮りアニメーション」の体験などで、アニメーションをテーマとした視覚のメカニズムを理解させるプログラムなど、多様なプログラムを展開している。
●手話付きギャラリートークが年間を通して実施されたのをはじめ、多様性を重視したプログラムが提供されている。

≪指摘された課題・提言等≫
●理解力を前提とする「写真」や「映像」は、多少対象を限定することになる。
●将来、写真や映像に興味を抱く人たちを積極的に開発する必要がある。
●体験プログラムは工夫されているが、常に、更新が求められるものでもある。
●オリジナル教材「色と形と言葉のゲーム」が実用新案登録され、製品化された。特性を生かして、教育現場以外での活用の道も探ってほしい。

### （２）図書・情報の収集と公開の促進　　【評点４】

≪評価の理由≫
●国内外の基本的な資料を収集しており、蔵書数は現在約１１万冊と、これだけの資料を持つ施設は国内では他に類を見ない。蔵書の豊富さ、稀覯書など総合的にみて日本一のものである。
●年間３万人の利用があり、蔵書検索サイトから結果を印刷しカウンターで請求することもできる。
●研究者、学生、写真ファンの人々にとって重要な場所であり楽しみの場所でもある。
●全国の大学図書館、国立情報研究所の総合目録データ登録をするなど、他の機関との相互関連も広げてサービスしている。
●コンスタントに図書の購入・寄贈による収集が継続的に行われている点では高く評価できる。
●展覧会にあわせた書籍の紹介などもとてもよい。

≪指摘された課題・提言等≫
●写真や映像に関する最新の情報に関して、伝達できるようなプラットフォームがあるとよい。
●学芸員や研究者の情報を共有できるような仕組みをお考えいただきたい。
●所蔵品に関する資料や画像データの公開、とりわけオンラインを通じた公開に関しては、一層の積極的な取組が求められる。

## ４　広報事業・情報発信の評価　　【評点４】

＜写真・映像文化の拠点として貢献する美術館＞

### （１）効果的な広報・宣伝　　【評点４】

≪評価の理由≫
●広報誌 eyes の発行を継続し都民への情報を発信しており、毎回興味をそそられる内容で、体裁も美術館らしくセンスが感じられる。
●プレスリリースをはじめ、プレスの対応もしっかりしており、記者へのブリーフィング、プレスの内覧会などメディアとのネットワーク構築に心がけている。
●告知が早く、プレス対応が柔軟。各メディアを熟知し、紙面やサイトの構成を意識したバラエティーに富んだ図版の配布が行われている。
●新聞、雑誌などいろんなメディアで TOP の記事を見ることも多く今までの広報の努力が少しずつ実を結んでいる。
●展示やイベントごとのターゲット設定に基づいた戦略的広報活動が実施され、コア層のさらなる取り込みと新規層獲得の両面で大きな貢献をしている。
●インバウンドに対応した多言語化が推進された。
●『ニァイズ 2』を活用したユニークなキャンペーンが継続されている。

≪指摘された課題・提言等≫
●研究者向けのメディアに関しても、将来的に考えていただきたい。

### （２）インターネット等を用いた情報発信の推進　　【評点４】

≪評価の理由≫
●「日本初期写真史」の丁寧に制作された解説動画は、コロナ禍の中、自宅で観賞できるオンライン展覧会として素晴らしい試みだった。今後も是非続けるべき。
●ツイート内容が、告知だけでなく、観賞アドバイス、展示作家の名言など、フォロワーを飽きさせない工夫がされている。ニャイズと「日本初期写真史」解説動画のコラボ・ツイートは、このプラットフォームの特性を十分に生かした秀逸な発信だった。
●WeChat を通じて中華圏向けの広報が強化された。
●インスタグラム・アカウントが開設され、ツイッターとは異なる若年層やインバウンド層への情報発信が行われた。

≪指摘された課題・提言等≫
●美術館の主要ゲイトウェイとしてのホームページの設計が、相変わらず質実に過ぎて、魅力に欠ける面がある。また館長挨拶や PR ビデオなど依然としてホームページとそのコンテンツについて改善の余地がある。
●「日本初期写真史」解説動画のような展覧会の代替コンテンツについては、同一ツイートを繰り返し発信し、コンテンツ先へと誘導することも検討してほしい。

## ５　来館者の視点、企業・団体の参加、ボランティア事業、地域連携の評価

＜開かれた美術館＞　　【評点５】

### （１）良質なサービスの企画・提供　　【評点５】

≪評価の理由≫
●ミュージアム・ショップ、カフェの運営については、どちらも魅力的な展開となっている。
●託児所サービスが試行され、子育て世代の利便性向上への足掛かりを作った。また、手話通訳付きギャラリートークなどの意義ある実践が行われ、バリアフリーに向けての取組も増えており評価できる。

≪指摘された課題・提言等≫
●ヘビーユーザーである年間パスポート利用者のために、その特典を一眼でわかるように表示することを検討するべき。

### （２）企業・団体等の参加促進　　【評点５】

≪評価の理由≫
●支援企業・団体が現在２４４法人と、国内ではまれにみる数の多さである。
●会員数は若干減少傾向にあるものの、会費収入は前年を超え 8,175 万円と歴代２位を更新した。
●ホームページ上の支援会員名とスポンサー企業サイトをリンクさせる方向で整備が進んでいる。

≪指摘された課題・提言等≫
●支援会員数、収入共にわずかに減少しているが、これは経済状況との関連もあるのでやむを得ない部分もあるかと思う。

（３）ボランティアの参画推進　　【評点５】

≪評価の理由≫
●教育普及部門の運営にはボランティアの存在は欠かせない。良質のボランティア組織を持つことは重要な任務である。
●ボランティアの登録者数は６７名、実施事業は３５回。担当学芸員の方々は忙しい業務の中、外部の有識者を招いてボランティア向けの研修会を催したり、連絡会を定期的に開いたりと、その運営と質の向上に常に気を配っていることが如実に感じられ、とても評価できる。

≪指摘された課題・提言等≫
●ボランティアの担当領域の拡大についても取り組むべき。世界的にはボランティアに積極的に業務を任せる傾向にある。
●組織をオープンかつ透明化していくためにも、ボランティアの主体的な活動実績を積み上げていくことや、NPO との連携の確立に、一層の努力が必要である。

（４）地域との連携強化　　【評点４】

≪評価の理由≫
●インバウンド対応のための多言語マップ作成など、「あ・ら・かるちゃー文化施設運営協議会」の活動が定例化し、広くまた充実した形で、NHK スタジオパーク、松濤美術館などと、面的に地域と連携していることは理解でき評価できる。
●周辺の学校のスクールプログラム参加は良い効果が期待できると思う。参加者が興味をおぼえ家族や地域住民と共にリピーターとなるきっかけとなればよいと思う。

≪指摘された課題・提言等≫
●連携する各館の具体的なヒトのつながりから生み出されるべき積極的活動について、事務、広報、学芸など各分野の専門スタッフの多様な連携が今後必要になるだろう。
●映像祭における地域連携プログラムの位置付けは、どこかで検討しなおしても良いのかもしれない。
●サテライトプログラムとして、もう少し前面に出してもよいと思う。

## ６．インフラの改善　　【評点４】

＜ミッション達成のための必要な基盤の整備＞

≪評価の理由≫
●館内表示や展覧会解説の英語併記、英語対応や救急救命対応ができる受付従事者の配置など、多言語化、バリアフリー化が推進された。
●セキュリティ対策が強化されたことも評価できる。

≪指摘された課題・提言等≫
●相変わらず入り口が分かり辛く、動線を変えることはできないが、誘導を工夫できないだろうか。リピーターにとっては、難なく入館できるのだが、初めての来館者にはわかりにくい面がある。
●恵比寿駅からガーデンプレイスに到着してから美術館までのアプローチが照明の不足などにより、催事を盛り上げる様な機能を十分に担っているとはいえない。立地上の制約(ガーデンプレイスの端に位置すること)もあって、難解な課題ではあるが、美術館への誘導の力も強いとは言えず、端的にいってあまり目立ちにくい。
●来年２月に予定されている恵比寿三越の撤退など、ガーデンプレイス自体が不活性な雰囲気に落ち込みつつあるだけに、屋外のサイン計画について、これまで以上に熟考・再検討すべきだろう。
●昨今の世相に対応してセキュリティチェックの実施や、今般のコロナ対策など、少し前までは美術館ではあまり想定していなかった事態に対応することが急務となった。こういう作業はやむを得ないこととはいえ、来場者にとっては多少の忍耐と不快さを伴うものであることは間違いない。少しでもスムーズに行って来場者の不満につながらないように手順の吟味、作業の習熟などが求められる。

# 資　　料

# 東京都写真美術館外部評価委員会設置要綱

（設　置）
第１　東京都写真美術館（以下「美術館」という。）の事業実績を客観的に評価し、事業効果を適正に測るとともに、改善事項の検討を進めるため、館長の私的諮問機関として東京都写真美術館外部評価委員会（以下「評価委員会」という。）を設置する。

（所掌事項）
第２　評価委員会は、次の事項について審議し館長に助言を行う。
（１）　美術館が掲げる定性目標、定量目標に基づく美術館事業の外部評価報告書に関すること。
（２）　その他、館長が必要と認めた事項に関すること。

（構　成）
第３　評価委員会は、学識経験等を有する者の中から、館長が依頼する委員６人以内で構成する。

（任　期）
第４　委員の任期は、３年とし、再任を妨げない。

（座長及び副座長）
第５　評価委員会に、座長及び副座長を置く。
２　座長及び副座長は、委員の互選により定める。
３　座長は、委員会を主宰し、会務を総理する。
４　副座長は、座長を補佐し、座長に事故があるときには、その職務を代理する。

（招　集）
第６　評価委員会は、館長が招集する。
２　館長は、必要に応じて、委員以外の関係者の出席を求めることができる。

（会議及び議事）
第７　委員会の開催及び議事は次のとおりとする。
（１）委員会は、原則として、委員の過半数が出席しなければ、会議を開催することができない。
（２）委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。
（３）館長は、大規模災害等により委員の出席が困難である場合は、書面により過半数の委員から意見を徴することにより、委員会の開催に代えることができる。

（謝金の支出）
第８　公益財団法人東京都歴史文化財団委員会等謝礼基準に基づき、委員に謝金を支出する。

（庶　務）
第９　評価委員会の庶務は、東京都写真美術館管理課において処理する。

（補　則）
第１０　この要綱に定めるもののほか、評価委員会に必要な事項は、館長が定める。

附則　この要綱は、平成１６年４月１日から施行する。
附則　この要綱は、令和２年４月１日から施行する。

# 東京都写真美術館外部評価委員会委員名簿　（令和2年4月～）

（敬称略：順不同）

| | 氏　名 | 職　業・役　職 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 座長 | 柏木博 | 武蔵野美術大学名誉教授 | 美術館・博物館<br>経営研究者 |
| 副座長 | 杉田敦 | 女子美術大学芸術学部教授 | 美術館・博物館<br>経営研究者 |
| | 倉石信乃 | 明治大学大学院理工学研究科教授 | 美術館・博物館<br>経営研究者 |
| | 片岡英子 | ニューズウィーク日本版副編集長、フォト・ディレクター | マスコミ関係者 |
| | 服部一人 | 日本大学芸術学部写真学科准教授 | 写真美術館ボランティア |